

防波堤に白い麻のワンピースを着た女が座っていた。つばの広い帽子をかぶり、小さいボストンバッグを横に置き、ハンカチで汗をぬぐっていた。女の前には青い空と青い海が広がっている。両側には陸地がせまり、小さな入り江となっていた。

小さな漁船が何艘か泊まっている。その間にさらに小さな船が海から戻ってきて、泊まった。男が一人、釣竿とびくを持って降り、女の方に向かって歩いてきた。

女は見てみぬ振りをしていたが、男がじっと見つめているのに気がついて、顔を上げ、愛想笑いを浮かべた。

「あんたよそ者だな」

「ええ」

「そこで何をしてる？」

「別に。ただ海を見ているだけ」

「そうか・・・」

男は通りすぎようとした。

「ちよつと待って。もしかして、どこか泊まれる所知らない？」

「泊まる所だったら、駅前旅館があるだろう」

「あそこは駄目だった」

女は首を横に振った。

「どうして？」

「あそこの女将が、私の事、商売女だろうって。自分の勘に間違いないって」

「商売女なのか？」

「まさか。ただの家出人よ。あわてて出てきたから、こんなに荷物も少ないし」

「そうか。だったらうちの離れに泊まるといい。誰も使っていないから」

「本当に？でも家族の方にご迷惑じゃないかしら」

「家族はいない。俺一人だ」

「そう、じゃあ、お言葉に甘えようかしら」

「いいさ、別に」

男はぶつきらぼうに言い、離れた所に停まっている白い軽トラックをあごで示した。

女は立ち上がり、服を伸ばすと、ポストンバッグを握りしめた。

軽トラックは、海から山側へと向かう坂道を登り、その中腹のあたりで右に折れた。しばらく行ってから、平屋建ての家の前で停まった。

「ここだ」

ぶつきら棒に言うと、男は車を降り、鍵も使わずに玄関を開けると、竿とびくを家の中にほおり込んだ。

「離れはこっちだ」

女はポストンバッグを持って男の後ろをついて歩いた。

それは離れというより、掘っ立て小屋と言ってもいい位簡素な建物だった。

だが、中にはベッドと棚があるだけだったが、案外清潔感の漂う空間だった。

「誰かここを使っていたの？」

「俺のお袋だ。ここで世話をしていたんだが、去年死んだ」

「そうだったの」

女は顔をしかめた。

「いやだったら、よそをあたってくれ」

「ううん、全然。ただ、あなたが見た目より優しい人なんだな、

と。思。っ。て。誰。も。他。に。手。伝。っ。て。く。れ。る。人。、。い。な。か。っ。た。の。？」

「いるもんか」

男は吐き捨てるように言った。

「お嫁さんは？」

「こんなこぶつきの男の所へなんか誰も嫁にこないさ」

「そうかしら」

「そうさ」

二人の間に沈黙が流れた。

「俺は家に戻るがあんたどうする？」

「ちよつと横にならせて。きのうから殆ど寝てないから」

「そうか、じゃ」

それだけ言うと、男は出ていった。

女はポストンバッグを棚の上に置くと、そのままベッドに倒れこんだ。

「おい、いつまで寝ているんだ」

男が再び離れに現れたのは、数時間たってからだだった。

「うーん」

女は声が聞こえたのか聞こえないのか、寝返りを打つと、そのまま寝息を立てた。

「仕方がないな」

男は盆に載せた食事を棚に置くと、音を立てないように、そっと出ていった。

次の日朝、外で物音が聞こえたので、女は慌てて離れから出た。母屋の外に男は立っている。シャツにズボン、そして上着を小脇

にかかえていた。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「きのうはありがとう。食事持ってきてくれたのね、全然気がつか  
なかつた」

「いや、大したもんじゃないさ」

「ううん、おいしかった。それで、空いたお皿どうしたらいい？」

「台所に置いておいてくれ」

家はいつも開けっ放しのようだった。

「わかつた」

男はそのまま軽トラックに乗り込んだ。

「お仕事？」

「ああ、役所に勤めている」

「役所に勤めているんだ」

「何、驚いているんだ」

「別に」

「食べたい物があつたら、適当に冷蔵庫から出すなり、料理して  
食べてくれ」

「そんなの悪いわ。どこか食堂でも探すから」

「そうか。じゃあ、俺は夕方になるまで帰らないから」

エンジンをかけた。

「ちよつと待って」

「何だ」

「名前、聞いてなかつた」

「ゲンだ。塚本ゲン。あんたは？」

「マリアよ」

「洒落た名前だな」

「母が信心深かったから」

「そうか」

男は一瞬女を見つめた後、ハンドルを握った。

「じゃあ」

「うん、行ってらっしゃい」

クルマはバッグで道路に出ると、方向を直して、前に加速していった。

女も道に出て、車が見えなくなるまで見送った。

「ゲンさん、ありがとう。いい人なのね」

小声でつぶやいた。

離れに戻ると、空いた皿の載った盆を持って、母屋に向かった。

「お邪魔します」

片手に盆を持ちながら、片手で戸を開けた。

台所は玄関を入れてすぐの所にあつた。使った食器を洗うと、すぐ横にあつたかごに入れた。手をタオルで拭くと、後ろを振り返った。

開けっ放しの戸から、家の中全体が見える。

小ぶりのテーブルと椅子、そして奥の部屋にはベッドが置かれている。

女は音を立てないように、そっと部屋の中に入っていった。掃除の行き届いた室内だった。

奥の部屋に行くと、ベッドの横に心地よさそうなゆり椅子が置いてある。無意識に、その椅子に体をうずめた。

「うわ、本がいっぱい。それにCDも」

反対側の壁一面に、棚が造り付けられ、本やCDがぎっしりとつまっていた。また、下部にはオーディオコンポもはめこまれていた。立ち上がって棚に近付くと、なでるように、そのコレクションを眺めた。

「難しい本ばかり」

ため息をつくど部屋を出た。

離れに戻ると、身支度を整え、外に出た。まだ午前中だというのに日差しは強い。

すれ違った通行人が女をじろりと見た。帽子を深くかぶり直すと、駅の方へ向かった。

銀座通りと標識のある道に出た。駅に向かう道のようなだった。銀座とは名ばかりで、どの店も古ぼけていて、やっているのかやっていないのかわからない。

やっとの事で、食堂を見つけると、中に入った。他の客は新聞を広げてコーヒーを飲んでいる中年の男一人だけだった。

「すみません、もうやっていますか？」

「やっていますよ。どこでも好きな所にどうぞ」

女は窓際の席に座った。テーブルの上にメニューはない。

その代わり、店中に貼られた張り紙に、メニューと値段が書かれていた。

小太りの女が水を運んできた。

「何にしますか？」

「モーニング・セットを」

「モーニングですね」

店の女は奥に行き、厨房に向かって何やら伝言した。

新聞をめくる音が聞こえる。それ以外は静かだった。耳を澄ませ

ば、波の音まで聞こえそうだった。

「おまちどう様」

店の女が盆にモーニング・セットを載せて持ってきた。

「うわ、おいしそう」

女の前には、厚切りのトースト、ハムエッグ、野菜、いい香りのするコーヒーが並べられた。店の女は少しだけ笑みを浮かべた。

本当にそれは古ぼけた店の外装を裏切るような美味な朝食だった。

「ご馳走様」

朝食が済むと、レジに向かった。金を払ってもなお、女は、そこに立っている。

「あの、何か？」

店の女が怪訝そうに見た。

「私、仕事探しているんです。ここで働けないかと思って」

「仕事？悪いけど、手は足りているんでね」

「そうですね、ごめんなさい」

肩を落として、店を出ようとした。すると、それまで黙って新聞を読んでいた男が口を開いた。

「仕事だったらあるかもしれない」

「え、本当ですか？」

女は振り返って男を見た。

「ああ、きのう郵便局長が、バイトの子が急にやめて困っているってこぼしてたさ。あたってみたらどうだ。この通りを下がった所だ」

「わかりました。行ってみます」

「保障はしないけどな」

「わかってます。ありがとうございます」

女は店の戸を開け、外に出た。透き通るような青空に感謝したい

ような気持ちになった。

「こんにちは」

言われた通り、通りを下がったその先に、小さな郵便局があった。空調の効いた室内に、紙やら何やらの独特な匂いがした。

中で頭の毛の薄い職員が後ろを向いていたが、声をかけにくく、壁際にあるベンチに腰掛けた。

「何か御用ですか？」

職員は振り返って女を見、同時に黒ぶちのメガネをずり上げた。

「あの、ここで働けないかと思って」

「働く？」

「はい。仕事を探しているんです」

「あんたよそ者だな」

「はい。きのう来たんです。でも、しばらくここにしようと思っ  
てます」

「今、どこにいるんだい？」

「ゲンさんの所です。塚本ゲンさん」

「あんたゲンさんのお客さんか」

「はい、まあ」

「それで郵便局の仕事はできるんだろね。お金の勘定とか」

「はい。学生の頃、郵便局でアルバイトしていたから、大丈夫で  
す」

「そうだったのか」

改めて調べるように女をじっと見た。

「局長さんですか？」

「そうだけど」

「お願いします。雇って下さい」

女は頭を下げた。

「まあ、頭なんか下げんでも。実際若い子がやめたばかりで困っていた所さ。こんな小さい郵便局でも、時間によっては混むからさ。何だったら、あしたから来るといい」

「本当ですか？」

女は嬉しそうな表情を見せた。

「ああ、けどな、服がな」

「服？」

「もう少し普通の服にしてくれないかな。そんな上等そうなんじゃない」

「上等じゃないんですけど」

改めて自分の服を見た。多少シワは寄っているが、シミ一つない綺麗なワンピースだった。

「わかりました、何か適当な服を探してきます。近くに洋服屋さん、ありますよね」

「商店街にある」

局長はうなずいた。

「じゃあ、明日、よろしくお願いします」

女は郵便局を後にした。

「おかえりなさい」

「あ、驚いた」

「ごめんなさい、驚かして。でも、夕食の支度をしていたのよ。泊めてもらったお礼に」

「そうか」

男は家の奥に入り、部屋の戸を閉めた。

再び姿を現した時には、Ｔシャツと短パン姿になっていた。

「その方がゲンさんらしい」

「そうか」

頭に手をやった。

「そう言えば、君も服を替えたのかい？」

「そう、今日、服を買ったのよ、どう？」

両手を広げ、一回転してみせた。

「驚いたな、そんな野暮ったい服でも、あんたが着ると、様になっている」

「そうでしょ」

女は嬉しそうに笑った。

「あした仕事に着ていこうと思って」

「仕事？」

「そう、仕事見つけたのよ、郵便局で」

「あんた、ずっとここにいてもりかい？」

「あんたじゃなくて、マリア」

「ああ、そのマリア、さん。もしかしてここに居つくつもりじゃ」

「そう。悪かった？ 離れ使ってないんでしょう。それとも他に予定があつた？」

「いや、そうゆうワケじゃないが、すぐに家に戻るんだろうと思つていた。家出人だつて言っていたじゃないか」

「そう。永遠の家出人」

「家の人が探しにくるぞ」

「こないわよ」

「そうか」

「だからしばらくここにいてもいいかしら」

「まあ、別にかまわないけど」

「そう、良かった。ありがとう。じゃあ、夕食にしましょう」

女は小さなテーブルの上に食事を並べ始めた。

「何かお酒があるといいんだけど」

男の顔を見た。

「ない事はない」

「本当？何？」

男は部屋の隅にあった棚からワインを一本持ってきた。

「すごい、いいの、こんな上等そうなのあけて」

「ああ」

「あははは、やだ、ゲンさんて見かけによらず面白い人なのね」

女は酔って椅子からころげ落ちた。食事は大方食べられた後だった。

「仕方ないな、酔っ払いは」

そういう男も目が赤くなっていた。女を抱き上げようとすると、男の首筋に手を回した。女の顔を見て、それから接吻した。

そのまま、両手で体を持ち上げると、ベッドの上まで運んだ。男は服を脱いだ。

振り返ると、女は服を着たまま、男を見上げていた。

「初めてなのか？」

「まさか」

女は首を振った。

「あなたに脱がせて欲しいの。大事な宝物のように」

男はベッドの上で女にまたがると、ブラウスのボタンをはずしな

がら、首筋に口付けした。

一方女は男の胸を何度もなでる。

「毛深い人って初めて」

「そうか？」

「そう。でも、毛深い人って情が深くって優しいって聞いた事がある」

「なる程、で、あんたは毛深くないのかな」

「毛なんか生えてないわよ、ほら」

ボタンが全部はずされ、女はブラジャーのホックを自分ではずした。男は指でブラジャーをつまむと、下から覗きこむように、胸の谷間を見た。

「本当だ。何も生えてない」

「触ってもいいのよ」

「ああ」

男は女の体から、ブラウスとブラジャーを剥ぎ取ると、白い上半身を見つめた。

「どうしたの？もしかして、ゲンさんこそ初めてじゃ」

「いや、初めてじゃない。けれど、遠い昔の事だ」

「そうだったの悪い事聞いたわね」

女は男の体から下着を剥ぎ取り、そして、自分もまた生まれたままの姿になった。そして、二人は固く抱き合った。

事が終わった後、ベッドの上で手を繋ぎあって横たわっていた。

「ごめんなさい、私、あなたに言ってなかったわね」

「うん？」

男の眠そうな声で返事をした。

「私結婚してるの」

「そうだったのか」

「でも、あんまりうまく行ってなくって、それで家出してきたの」

「ありがとうございます」

女は郵便局に来た客に声をかけた。

「随分慣れてきたみたいだな」

局長が横を向いて言った。

「はい」

「計算も早いみたいだし、安心できるよ」

「そうですか」

また、新しい客が入ってきた。

大きな封筒に切手を沢山貼っている。封筒の中身を確認めると言った。

「320円ですね、丁度いただきます」

「良かった、足りてて」

「はい大丈夫ですよ」

女は笑顔を見せた。

「局長さん、いい人が来て、良かったね」

「はあ」

次に入ってきたのは男だった。

「ゲンさん・・・」

声をかけたのに返事もせず、局長の座る窓口に行った。

「送金したいんだが」

「はいはい」

局長は現金と振り込み用紙を受け取った。

「二十万円と手数料、確かに受け取りました」

局長は受け取りのハンコを押した。男は何もいわずに、郵便局を出ていった。

「ゲンさん、誰かにお金送ったんですか？お母さんは亡くなったって聞いたけど」

「ああ、毎月のことさ」

「毎月？もしかして、毎月あんなに沢山送っているって事？」

「ああまあ」

急にしぶい顔になった。

「誰に送っているか、ご存知なんですか？」

「知らない。本人に聞いてみたら？あんだゲンさんの所にいるんだろう」

「そうだけど・・・」

女は爪を噛んだ。

「帰ってたのか」

男が離れの戸を開けると、女がベッドの上に座り込んでいた。

男はまだ仕事の格好をしている。

「うん」

「めしは？」

「もう、食べた。駅前の食堂で。でもあまり食べれなかったけど」

「そうか」

男は戸を閉めかけた。

「今日、郵便局で会ったわね」

「そうだったか？」

「そう。あなたはお金を送りにきた。20万円も。いったい誰に送ってるの？毎月なんですってね」

「どうしてそれを？」

「局長さんに聞いた」

「局長？じゃあ、何でも局長に聞いたらいいじゃないか」

「誰に送ってるかは知らないって。ねえ、教えて、怒ったりしないから。あなた、本当は奥さんがいるの？それとも愛人？そうじゃなかったら、そんな大金送ったりしないわよね」

「そんなのどうだっていいじゃないか。あんたには関係ない」

「関係ないですって？よくそんな事言えるわね。私を誘っておいで。まるで独身者のふりをしていたじゃない。それってだました事になるのよ」

「そんなんじゃないんだ」

「じゃあ、何？誰なのその相手？」

「わかった、じゃあ、こうしよう。今度の週末に連れていく」

「連れていくってどこへ？」

「お金を送っている相手の所へさ」

「何よ、じらさないですよ。口で言っつてよ。相手は誰なのか」

男は首を横に振った。

「口で説明するより、見たほうが早い。とにかくそれではっきりするんだから、いいだろう」

「わかった。だったらそれでいい」

「これからメシ作るけど、食べるか？あんまり食べてないんだらう？」

「いい。何だか疲れちゃった」

「あんまり無理するなよ」

女は返事をせず顔をそむけた。

男は黙って出ていった。

軽トラックは海岸沿いの道を走っていた。空は晴れ渡り、海は美しいまでに青かった。

「ずっと黙ったままなんだな」

男はハンドルを握りながら言った。

開けた窓から片肘を出して、女は外を見ていた。

「何を話せていうの？あなたこそ、これからどこへ行くか、言ってくれないくせに」

「だから隣町だって言っただろう」

「隣町ってこんなに遠いの？もうずっと走っているじゃない」

「田舎はそんなもんだ。地面ばかりある」

「そう」

「でも、もうすぐだ。見えてきた」

「何が？」

「あの白い建物だ」

入り江の反対側にある建物が太陽の光を受けて白く光っていた。

「あれ？あれってもしかして病院じゃないの？」

「そのもしかだ」

「あなたがお金を送っている相手って入院しているの？」

「まあ、そんなものだ」

「それで毎月仕送りしていたのね」

それまで陰のあった女の顔が、にわかにかんやくなった。

アクセルの踏み込まれた車は、スピードを増し、やがて、病院の敷地に入ってしまった。

駐車場で二人は車を降りた。海からの風が二人の間を吹きぬけて

いく。

「何だか変。私の思っている病院とは違う。もっと救急車が来たり、病氣の人がいたりするもんじゃない？」

「ここはそうゆう病院とは違うんだ」

病院の中に入っても人気はあまりなかった。静かで、消毒薬のする階段を上りつめると、廊下に出た。そこで、男はある病室の扉をノックした。しかし返事はない。

「今日はまだかな」

「誰の事？」

「母親だよ」

「母親？」

男は扉を開けた。

ベッドの上に横たわっていたのは、管につながれた女の人だった。手入れの行き届かない髪の毛が、窓から入る風に揺れていた。

二人が病室に入ったのに気がつく気配もない。

「あの、こんにちは」

女が静かにベッドに近づいた。しかし、返事はない。

「いったいこれは？」

「元の婚約者だ」

「何があったの？」

「事故。俺が運転していた車が雨でスリップしたんだ。反対車線に突っ込んで、走ってきたトラックに正面衝突さ。彼女だけ、こんなになっちまった」

「そんな事があったの・・・」

女は顔をすりよせて、ベッドの上の肉体を見た。肌は乾いて、ま

るで、命が通っていないようだった。生気のない顔は、若いのか年をとっているのか、区別がつかない。

「背が高い人だったのね」

「背ね、そうだったかもしれない」

急に物音がし、振り返ると、病室の扉が開き、老婆が入ってきた。薄汚れたエプロンをしたまま、サンダル履きに靴下を履いていた。

「あんた、そんな所で何してるんだい？」

まるで泥棒でも見つけたかのように叫んだ。

「あ、あの」

「お母さん、紹介します。この人はマリアさんと言って、僕の友達です」

「マリアかなんか知らないが、何で連れてきたんだ。うちの娘を笑い物にしようって魂胆かい？」

「そんなつもりじゃ・・・」

「じゃあ、どんなつもりなんだい？」

老婆はガラス瓶に挿してあった、花をわし掴みにすると、男めがけて投げつけた。

「おちついて下さい」

「おちついてなんかいられないよ。何の権利があって、うちの娘の部屋に他の女なんか連れてくるのさ」

ますます興奮して、手当たり次第、掴める物は何でも掴んで、投げ出した。

「わかりました、わかりました。俺が悪かった。今日は帰ります」  
男はマリアの手を取ると、急いで病室を出た。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫さ。それよかあんたにまで嫌な思いをさせちまつたな」

「ううん、そんな事ない」

「ううう」

病室の中から激しい泣き声が聞こえた。

「行こう」

「うん」

二人は軽トラックに乗り込んだ。エンジンをかける音が聞こえる。

「腹が減っただろう。メシを食いに連れていくよ」

「でも、悪いわ。毎月あのおばあさんに20万円渡してるんでしよう」

「ああ、でも一人暮らしの俺には大した金の使い道なんかないしな」

「そう？」

「それに心配しなくても、都会の高級レストランとは違うから、値段も知れている」

「そう。じゃあ、連れて行ってくださいな」

車はさらに遠くに向かって走りだした。そして、次に停まった所は、いかにも大衆食堂といった感じの建物の前だった。車が駐車場に沢山停まっている。

「繁盛しているのね」

「結構うまいんだ」

中に入ると、食事時でもないのに、店の中には人がかなり入っていた。それでも窓際の席に座る事ができた。

「フライ定食にしよう。ここの看板料理だ」

「いいわ」

「ビールは？」

「あなた運転してるんでしょ」

「ちよつとぐらいいいさ」

女は少し考えてから言った。

「じゃあ、ちよつとだけ。まさかあなた死に急いでいるなんて事ないわよね」

「俺だってまだ生きて、楽しい事したいさ」

「楽しい事ってどんな事？」

「さあ、例えば、釣りに行ったり、いい音楽を聴きながら酒を飲んだり、本を読んだり、かな」

「ふーん」

「楽しいと思わないのか？」

「だって、それって一人でする事ばかり。それじゃ寂しくない？」

「じゃあ、あんたの言う楽しい事ってなんだ？」

「そうね、愛する人と一緒に暮らして、喜びや悲しみを共にする事かな」

男は何も言わなかった。

「何よ、何か言つてよ」

「いや、ロマンチストなんだな」

「ロマンチストなんかじゃないわよ。普通じゃない、それって」

「そうかもな」

食事とビールが運ばれてきた。

「うわ、おいしそう」

皿の上には、揚げたばかりの海の幸が音を立てて積み重なっていた。

「そうだろう。ここの息子が漁師をやってるんだ。だから新鮮な

んだ。食ってみろよ」

女は一口フライにかぶりついた。

「うん、おいしい」

男は満足気にビールを飲むと、同様に食べ始めた。

「あの人もこのお店に来たの？」

随分食べ進んだ後に女が口を開いた。

「あの人って誰だ？」

「だから、あの入院している女の人」

「さあな」

「何、それ。言いたくないの？」

「思い出したくないんだ」

「そう、ごめんなさい。でも、別にあの人だけじゃなくって、他にもいたんでしょう？」

「あんな事があつた後じゃ、誰も寄り付かないさ」

「本当？こんな男前なのに」

「お世辞はよしてくれ。それに、毎月女に仕送りしている所に誰が寄り付くか」

「でも、そんなの言わなきゃわからないでしょう」

「あんな馬鹿だな」

男は見下すように女を見た。

「田舎じゃ何でも筒抜けだよ。どこで何したか。どれだけ金を使っただか」

「でも、局長さんは誰に送金してるか知らないって」

「あんたの前だからそう言っただけさ。町中の連中が、俺が事故の後、ずっと金を送り続けているのを知っている。そして、母親達が娘に俺は避けるように言っているんだ」

「そうだったの？でもいくらお金に自由がきかなくても、あなた

の事、好きだっていう人位いたでしよう？」

「だからあんたは馬鹿だっていうんだ」

女は黙り込んだ。

「ごめん、言い過ぎた」

「ううん、ただ、あなたって不器用な人なんだなって。でも、そ

んな不器用な所が頼もしい」

「たのもしいか・・・」

「褒めているのよ、わからない？」

「わからん」

ビールを飲み干した。

「ねえ、私、海に行きたい。いいでしよう」

「海はすぐそこだ」

食事の後、二人は道の反対側にある海岸に出た。

「不思議ね。海がこんなに綺麗なのに誰もいないなんて」

「ここは岩が多くて泳げないんだ。砂浜にいたら、多少にぎわっているさ。家族連れとか」

「ううん、やっぱり違う。どこかひっそりとしている」

「都会がなつかしくなったか？」

「その反対。ここが気にいったのよ。言わなかった？私とにかく海の見える所に行きたくて電車に乗ったって」

「初耳だな」

「心が壊れてしまった時、海を見たら癒されるような気がするの」

「いやされたのか？」

「一日、二日じゃ無理。でも毎日少しづつね」

「そんなものか」

男は足元にある石を拾うと遠くへ投げた。海に落ちる音がかすかに聞こえた。

「私、ずっとここに住みたい。いい？」

「何も俺に聞かなくても、あんたが決める事だろう」

「だってあなた大家さんじゃない」

「ああ、そうゆう事か。それだったら、別に離れは使っていないから好きにしたらいい」

「ありがとう。そう言ってくれると思った。でもその前に身辺整理をしなきゃ」

「身辺整理？」

「そう。だってこのまんまだったら、私、人妻のまんまなのよ」

「一旦帰るのか？」

「そう」

「大丈夫なのか？暴力振るわれたりしないのか？」

「それは大丈夫。そんな人じゃないから」

「男が感情に流されると、何をするかわからない」

「大丈夫。心配しないで。なんとか穏便に事を済ませるつもり」

「そうか」

「それに荷物も取ってこなきゃ。着る服もまともがないんだから」

「服くらい、ここで買えばいいじゃないか」

「他にも色々あるのよ」

「送ってくれてありがとう」

月曜日の朝、軽トラックが駅の前に停まった。女は、ポストンバッグを持って車を降りると、運転席を見た。

仕事着を着た男は軽くうなづく。

女が駅の中に姿を消し、電車がホームに入るのを見届けると、車はロータリーを出ていった。

夕方、家に帰ってくると、誰もいない部屋の電気をつけた。物音は何もしない。

男は一旦外に出ると、離れの戸を開けた。

そこにも人の気配は一切なかった。

ただ、女がこの町で買った服だけが、ハンガーに吊らされて揺れていた。

両手でその服を掴むと、その中に顔をうずめた。

女がいなくなつて、もう二週間がたとうとしていた。しかし、帰ってくる気配は全くない。

「ゲンさん」

男が仕事から帰って家に入ろうとするそのときに、後ろから声を掛ける者がいる。

振り返ると、郵便局長だった。

「なんだ、あんたか」

「あんたかはひどいな。せつかく現金書留を持ってきたのに」

「現金書留？」

「そう。はいこれ」

手渡された封筒の重みを感じた。

「随分入っているね」

「ああ」

「その人、あれだろう。いつもお金送っている人」

「ああ」

「どうした風の吹き回しかね。向こうからお金送ってくるなんて」  
「さあ」

執拗な質問を振り切るように男は家に入ろうとした。

「ちよつと待って」

「なんだ。まだあるのか」

「あんたんとこの人、まだ帰ってない？」

「マリアの事か？」

「そう、そのマリアさん。少しだけ休むって言ったきり、もう二週間だもんな。なんか連絡ないの？」

「さあ」

「やっぱりよそ者はあてにならない。田舎暮らしにあきたらすぐこれだ」

「あいつはそんな人間じゃない」

声を荒げた。

「ごめん、変ないい方して。僕だって彼女の事頼りにしていたんだ。仕事はきっちりこなすし。ねえ、電話番号教えてくれないかな」

「電話番号なんか知らない」

「知らない？ ゲンさんの知り合いじゃなかったのか」

「もういいだろう」

男は家に入ると、目の前で戸を閉めた。

局長の気配がなくなると、お気に入りの椅子に座り、封筒を手で破り開けた。中には札がずっしり入っている。その横に指を入れてみた。

「あつた」

広告の裏を使った小さな紙切れに、下手くそな字で、こう綴られていた。

「拝啓お元気ですか。この間は申し訳ない事をしました。これまでもずっと娘を気にかけてくれたあなた様の温情を忘れて、ひどい事を言ってしまった。お友達にも詫びを申し上げます。それから、娘にはもう十分にしていたいただきました。これからどれだけ長生きするかわかりませんが、今までいただいた分で結構です。ありがとうございます。ございました。とりあえず、今月送っていただいたお金をお返しします。皆様によろしくお伝え下さい。草々」

「ちえ、皆様って誰の事だ」  
封筒をベッドの上にほおり投げた。

沖合に小さな船が波に揺れている。男が一人、釣り糸を垂れていた。

「お、釣れた」

竿にかかったのは思いのほか、大きくて立派な魚だった。

「今日はこれ位にしておくか。どうせ一人暮らしたからな」

釣り道具を丁寧に仕舞うと、陸に向かって進み始めた。が、急に何か気がなくなって進むのをやめると、双眼鏡を取り出した。

「誰かいる」

双眼鏡を置き、再びボートを進めた。

岸につくと、釣竿と魚籠を持ってボートを降りた。防波堤の上からその男を見ている者がいる。初めて会った時と同じ白いワンピースを着ている。

ゆっくりと女に向かって歩み始めた。

「久しぶりだな。もう帰ってこないかと思った」

「思ったより色々時間がかかって。でも、見て、もう全部引き上

げてきたのよ」

横においてあるスーツケースを叩いた。それは座っている女の背の丈程ある大きなスーツケースだった。

「随分沢山持ってきたんだな」

「これでもかなり処分したのよ。大変だったんだから」

「そうだろうな」

男は軽く笑った。その時、海風が二人の間を通りぬけた。

「はくしょん」

「寒いのか？」

「ううん、大丈夫」

そういいながら、女はむき出しの腕をさすった。

「強がりを言うな。季節は知らない間に変わっているんだ」

男は自分の着ている薄手のジャケットを脱ぐと、女の肩にかけた。

「ありがとう。あなたってやっぱり優しい人ね」

そう言いながら袖に腕を通した。

「じゃあ、いくか」

「うん」

片手に釣り道具を持ち直すと、もう一方の片手にスーツケースを持って、自分の白い軽トラックに向かって歩き始めた。その後を、男のジャケットを着た女がだまってついて歩いていた。